

演習問題 2.6 S が正規直交系るとき 1 次独立系である事を示せ。

$\mathbf{x}_1, \dots, \mathbf{x}_n \in S$ とする。 $a_1\mathbf{x}_1 + \dots + a_n\mathbf{x}_n = \mathbf{0}$ が成立しているとする。各 $i = 1, \dots, n$ に対し $0 = (\mathbf{0}, \mathbf{x}_i) = (a_1\mathbf{x}_1 + \dots + a_n\mathbf{x}_n, \mathbf{x}_i) = a_1(\mathbf{x}_1, \mathbf{x}_i) + \dots + a_n(\mathbf{x}_n, \mathbf{x}_i) = a_i(\mathbf{x}_i, \mathbf{x}_i) = a_i$ となるので 1 次独立が分かる。

演習問題 2.7 $\mathbf{x}_1, \dots, \mathbf{x}_n$ がお互いに直交するとき

が成立する事を示せ。

$$\begin{aligned} \|\mathbf{x}_1 + \dots + \mathbf{x}_n\|^2 &= (\mathbf{x}_1 + \dots + \mathbf{x}_n, \mathbf{x}_1 + \dots + \mathbf{x}_n) \\ &= \left(\sum_{i=1}^n \mathbf{x}_i, \sum_{j=1}^n \mathbf{x}_j \right) = \sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^n (\mathbf{x}_i, \mathbf{x}_j) \\ &= \sum_{i=1}^n (\mathbf{x}_i, \mathbf{x}_i) = \|\mathbf{x}_1\|^2 + \dots + \|\mathbf{x}_n\|^2 \end{aligned}$$

演習問題 2.8 [ベッセルの不等式] $S = \{\mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2, \dots, \mathbf{x}_n\}$ を正規直交系とする。任意のベクトル $\mathbf{x} \in L$ に対し

$$|(\mathbf{x}, \mathbf{x}_1)|^2 + |(\mathbf{x}, \mathbf{x}_2)|^2 + \dots + |(\mathbf{x}, \mathbf{x}_n)|^2 \leq \|\mathbf{x}\|^2$$

が成立する。等号成立は \mathbf{x} が $\mathbf{x}_1, \dots, \mathbf{x}_n$ の線型結合で書けるときに限る。

$$\begin{aligned} \mathbf{y} &= (\mathbf{x}, \mathbf{x}_1)\mathbf{x}_1 + \dots + (\mathbf{x}, \mathbf{x}_n)\mathbf{x}_n \text{ とおく。} (\mathbf{y}, \mathbf{y}) = \left(\sum_{i=1}^n (\mathbf{x}, \mathbf{x}_i)\mathbf{x}_i, \sum_{j=1}^n (\mathbf{x}, \mathbf{x}_j)\mathbf{x}_j \right) = \sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^n \left((\mathbf{x}, \mathbf{x}_i)\mathbf{x}_i, (\mathbf{x}, \mathbf{x}_j)\mathbf{x}_j \right) = \\ &= \sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^n (\mathbf{x}, \mathbf{x}_i)\overline{(\mathbf{x}, \mathbf{x}_j)} \left(\mathbf{x}_i, \mathbf{x}_j \right) = \sum_{i=1}^n (\mathbf{x}, \mathbf{x}_i)\overline{(\mathbf{x}, \mathbf{x}_i)} = \sum_{i=1}^n |(\mathbf{x}, \mathbf{x}_i)|^2 \text{ 及び } (\mathbf{x}, \mathbf{y}) = \left(\mathbf{x}, \sum_{i=1}^n (\mathbf{x}, \mathbf{x}_i)\mathbf{x}_i \right) = \\ &= \sum_{i=1}^n \overline{(\mathbf{x}, \mathbf{x}_i)}(\mathbf{x}, \mathbf{x}_i) = \sum_{i=1}^n |(\mathbf{x}, \mathbf{x}_i)|^2, (\mathbf{y}, \mathbf{x}) = \left(\sum_{i=1}^n (\mathbf{x}, \mathbf{x}_i)\mathbf{x}_i, \mathbf{x} \right) = \sum_{i=1}^n (\mathbf{x}, \mathbf{x}_i)(\mathbf{x}_i, \mathbf{x}) = \sum_{i=1}^n (\mathbf{x}, \mathbf{x}_i)\overline{(\mathbf{x}, \mathbf{x}_i)} = \\ &= \sum_{i=1}^n |(\mathbf{x}, \mathbf{x}_i)|^2 \text{ が成立するので,} \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} (\mathbf{x} - \mathbf{y}, \mathbf{x} - \mathbf{y}) &= (\mathbf{x}, \mathbf{x}) - (\mathbf{x}, \mathbf{y}) - (\mathbf{y}, \mathbf{x}) + (\mathbf{y}, \mathbf{y}) \\ &= \|\mathbf{x}\|^2 - \sum_{i=1}^n |(\mathbf{x}, \mathbf{x}_i)|^2 - \sum_{i=1}^n |(\mathbf{x}, \mathbf{x}_i)|^2 + \sum_{i=1}^n |(\mathbf{x}, \mathbf{x}_i)|^2 \\ &= \|\mathbf{x}\|^2 - \sum_{i=1}^n |(\mathbf{x}, \mathbf{x}_i)|^2 \end{aligned}$$

となる。 $(x - y, x - y) = \|x - y\|^2 \geq 0$ より不等式が成立する。等号成立は $x - y = 0$ 即ち x が x_1, \dots, x_n の線型結合で書けるときに限る。

演習問題 2.9 直交補空間 S^\perp は L の部分空間である事を示せ。

$S^\perp = \{x \in L \mid \forall y \in S, (x, y) = 0\}$ が定義である。 S の任意のベクトル y に対し $(0, y) = 0$ となるので、 $0 \in S^\perp$ となる。よって $S^\perp \neq \emptyset$ である。

S^\perp の任意のベクトルを x_1, x_2 とする。任意の $y \in S$ に対し $(x_1, y) = 0, (x_2, y) = 0$ が成立している。 $(x_1 + x_2, y) = (x_1, y) + (x_2, y) = 0 + 0 = 0$ となるので $x_1 + x_2 \in S^\perp$ となる。

S^\perp の任意のベクトル x と任意のスカラー $\alpha \in K$ に対し、 $y \in S$ とすると、 $(\alpha x, y) = \alpha(x, y) = \alpha \cdot 0 = 0$ となるので、 $\alpha x \in S^\perp$ となる。以上により S^\perp は L の部分空間になる。

演習問題 2.10 M_1, M_2 を有限次元計量線型空間 L の部分空間とするとき、次を示せ。

- (1) M_1 の任意の元と M_2 の任意の元が直交しているとき、 M_1 と M_2 は直交するといい、 $M_1 \perp M_2$ と書くとき $M_1 \perp M_2 \iff M_1 \subseteq M_2^\perp \iff M_2 \subseteq M_1^\perp$ が成立する。
- (2) $M_1 \subseteq M_2$ ならば $M_2^\perp \subseteq M_1^\perp$
- (3) $(M_1 + M_2)^\perp = M_1^\perp \cap M_2^\perp$
- (4) $(M_1 \cap M_2)^\perp = M_1^\perp + M_2^\perp$

(1) M_1 と M_2 が直交する事は「 $\forall x_1 \in M_1, \forall x_2 \in M_2; (x_1, x_2) = 0$ 」と同値である。「 $\forall x_2 \in M_2; (x_1, x_2) = 0$ 」と「 $x_1 \in M_2^\perp$ 」は同値である。よって $M_1 \perp M_2 \iff M_1 \subseteq M_2^\perp$ となる。

「 $\forall x_1 \in M_1, \forall x_2 \in M_2; (x_1, x_2) = 0$ 」は「 $\forall x_2 \in M_2, \forall x_1 \in M_1; (x_1, x_2) = 0$ 」と同値であり、「 $\forall x_1 \in M_1; (x_1, x_2) = 0$ 」と「 $x_2 \in M_1^\perp$ 」は同値である。よって $M_1 \perp M_2 \iff M_2 \subseteq M_1^\perp$ となる。

(2) (1) において M_2 を M_2^\perp に置き換えると $M_1 \perp M_2^\perp \iff M_1 \subseteq (M_2^\perp)^\perp \iff M_2^\perp \subseteq M_1^\perp$ となる。 $(M_2^\perp)^\perp = M_2$ なので $M_1 \subseteq M_2 \implies M_2^\perp \subseteq M_1^\perp$ が成立する。

(3) x を $M_1^\perp \cap M_2^\perp$ の任意のベクトルとする。 $x \in M_1^\perp$ より任意の $y_1 \in M_1$ に対し $(x, y_1) = 0$ となる。同様に任意の $y_2 \in M_2$ に対し $(x, y_2) = 0$ となる。 $M_1 + M_2$ の任意のベクトル y に対し $y_1 \in M_1$ 及び $y_2 \in M_2$ が存在して $y = y_1 + y_2$ となる。このとき $(x, y) = (x, y_1 + y_2) = (x, y_1) + (x, y_2) = 0 + 0 = 0$ となるので、 $x \in (M_1 + M_2)^\perp$ となる。よって $M_1^\perp \cap M_2^\perp \subseteq (M_1 + M_2)^\perp$ が成立する。

$M_1 \subseteq M_1 + M_2$ より (2) を用いると $(M_1 + M_2)^\perp \subseteq M_1^\perp$ となる。同様に $(M_1 + M_2)^\perp \subseteq M_2^\perp$ となる。よって $(M_1 + M_2)^\perp \subseteq M_1^\perp \cap M_2^\perp$ である。以上により $(M_1 + M_2)^\perp = M_1^\perp \cap M_2^\perp$ となる。

(4) (3) において M_1, M_2 を M_1^\perp, M_2^\perp に置き換えると $(M_1^\perp + M_2^\perp)^\perp = (M_1^\perp)^\perp \cap (M_2^\perp)^\perp$ となる。よって $(M^\perp)^\perp = M$ より $(M_1^\perp + M_2^\perp)^\perp = M_1 \cap M_2$ となる。両辺の \perp をとると $(M_1 \cap M_2)^\perp = ((M_1^\perp + M_2^\perp)^\perp)^\perp = M_1^\perp + M_2^\perp$ となる。

演習問題 2.11 線型写像 T の正規直交基底による表現行列を A とするとき次を示せ。

- (1) T はエルミート変換 $\iff A$ はエルミート行列
- (2) T はユニタリー変換 $\iff A$ はユニタリー行列

$A = (a_{ij})$ を n 次行列とする。最初に「 A がエルミート行列 \iff 任意の $u, v \in K^n$ に対し $(Au, v) = (u, Av)$ が成立する」を示しておく。

A がエルミート行列ならば、任意の $u, v \in K^n$ に対し $(Au, v) = (Au)^T \bar{v} = u^T A^T \bar{v} u^T \overline{A^T v} = u^T \overline{A^* v} = u \overline{Av} = (u, Av)$ が成立する。

逆に任意の $u, v \in K^n$ に対し $(Au, v) = (u, Av)$ が成立しているとする。 $e_i (i = 1, \dots, n)$ を基本ベクトルとする。 (Ae_i, e_j) を計算すると A の (j, i) 成分である事が分かる。同様に (e_i, Ae_j) を計算すると A^* の (j, i) 成分である事が分かる。以上により $A = A^*$ となる。 S を正規直交基底とするし、 $u = \Phi_S(x), v = \Phi_S(y)$ とする。

$$\begin{aligned}
 T \text{ はエルミート変換} &\iff \forall x, y \in L; (T(x), y) = (x, T(y)) \\
 &\iff \forall x, y \in L; (\Phi_S(T(x)), \Phi_S(y)) = (\Phi_S(x), \Phi_S(T(y))) \\
 &\iff \forall x, y \in L; (A\Phi_S(x), \Phi_S(y)) = (\Phi_S(x), A\Phi_S(y)) \\
 &\iff \forall u, v \in K^n; (Au, v) = (u, Av) \\
 &\iff A \text{ はエルミート行列}
 \end{aligned}$$

ユニタリーを示すには、同様に「 A がユニタリー行列 \iff 任意の $u, v \in K^n$ に対し $(Au, Av) = (u, v)$ 」が成立する事を示し、以下同様に証明を実行すればよい。